

截金

截金（きりかね）とは、極薄の金や銀などの金箔を切り取り、木などの素地（下地）に貼り付けて、微細で複雑な模様を表現する装飾技法である。1981 年に重要無形文化財に指定された。

飛鳥時代（552－645）にアジア大陸から渡来した截金は、伝統的に仏像の装飾に使われていた。17 世紀から 18 世紀にかけては、より早く簡単に塗れる金泥の使用に取って代わられた。しかし、京都の 2 つの寺院がこの技法を守り続け、第二次世界大戦後、宗教以外の美術品に応用され、復活した。

金箔は息を吹きかけると破れてしまうほど繊細なため、截金職人は何枚も金箔を貼り合わせて強度を高めている。このとき、箔は熱せられた灰の上に置かれ、重ね合わされた箔が他の箔と密着するのに十分な熱を持つ。職人はピンセットと、箔がくっつきにくく、静電気を帯びにくい竹製のナイフで重ねた箔を持ち、カットする。箔は髪の毛より細いものもあり、丹念に作品の表面に貼りつけて、デザインや彫刻を装飾する。

石川県出身の西出大造（1913-1995）は截金の技術が評価され、1985 年に重要無形文化財の保持者に認定された。